

## 博報堂教育財団 第 14 回「日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	蘇 克保(ソ コクホ)
在住国名	台湾
所属・役職	東呉大学 外国語文学部 日本語文学科・准教授
招聘回(招聘研究期間)	第 14 回 ( 2019 年 9 月 1 日～ 2020 年 8 月 31 日)
受入機関	国立国語研究所
招聘研究テーマ	台湾人日本語学習者発音指導について—日本語母語話者の聴覚許容度を中心に—
研究目的	<p>日本語教育の分野において、外国人の発音研究は盛んで、研究成果もすでに多い。例えば、日本語の長音の場合には母音別の調査研究までである。研究結果としては、ネイティブは母音を発音するときに母音ごとに発音の長さを変えており、これは t 検定でも有意差がみられることが明らかにされた。ただし、こうした調査で明らかにされたのは sec 単位(千分の1秒)で差異が見られるという事実である。学習者はもちろん、日本語教師といえども千分の一秒まで発音を把握することはほぼ不可能であるし、また、指導の基準まで厳格になると学習者の習得意欲を消失させてしまう可能性も出てくる。そこで、適切だが厳しすぎない指導を心掛け、発音より内容を重視する、という教師の考え方に従って指導法を考えてみたい。つまり、発音学習のゴールを日本人が違和感を覚えない程度のレベルにおくという考え方である。では、若干不正確であったとしても、自然に聞こえる日本語の発音基準はどこにあるのか、それを明確にすることは重要である。そこで、本研究では、日本人母語話者、特に若年層への調査を進め、この点を明らかにすることを目指す。これにより、学習者は厳しすぎる基準に縛られることなく、自然な発音を習得することが可能になると考える。</p>
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>日本国内で行われる学会に参加する、一橋大学言語社会研究科のゼミに出る、国語研で開催される様々な研究発表会に参加するなどして、日本語研究に関する知識の幅を広げ、自身の研究に取り入れることのできる要素などについて探った。新型コロナウイルスの感染が拡大する中で中止された学会もあるが、ビデオ会議での参加や発表された要旨集などから、多くの最新の知見を得た。</p> <p>国語研の図書館は蔵書が豊富で、雑誌、書籍などの参考文献はいつでも読むことができたので、可能な範囲でこうした環境を利用した。</p> <p>また、一橋大学言語社会研究科のゼミを通じてできたネットワークにより、フィールドワークで日本語のネイティブスピーカーの意識調査を実施し、また、フォローアップ・インタビューで日本人聴覚の判断基準も明らかにした。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大の影響で調査が難しかった。そのため、被調査者は少人数にならざるをえず、そのデータをういた分析となった。</p> <p>中国語話者は、有気無声破裂音と無気無声破裂音を区別して発音するのにかなり神経を使っている。しかし、日本語話者にとっては弁別的な意味がないのが原因と考えられるのかもしれないが、聴覚調査では意味の誤解や不自然さを感じる比率は低かった。ただ、破擦音を発音する場合には、中国語を母語とする学習者は強烈な息を帯びさせて発音するためか、日本語母語話者は意味の誤解にまではいたらないが、不自然さを感じる傾向があることがわかった。</p> <p>今回の調査、分析を通して得られた知見としては、台湾の日本語教室でこれまで行われてきた音声指導は、発音学習のゴールを日本人が違和感を覚えない程度のレベルにおくという考え方からすれば、それよりも厳しいことが分かった。現状、教室で教師が求めるレベルは、日本語のネイティブスピーカーの受容度よりも厳格である。したがって、今後は、日本人が許容でき、また、学習者の習得意欲も削がない程度の習得を目指すために相応しい音声教材と指導法を考案しなければならないと考えた。また、台湾では、「有声子音」をもつ台湾語の使用が拡大することで、中国語には</p>	

なく習得が難しかった日本語の破裂子音・破擦子音の習得も容易になる可能性があることから、この点についても継続的に観察をしたい。

### 3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))

・題目「台湾人日本語学習者への発音指導について—日本語母語話者の聴覚許容度を中心に—」

『世新日本語文研究』、世新大学日本語学科発行、2020年11月投稿予定

中国語を母語とする学習者は、母語である中国語と日本語とで発音システムが異なることから、パ行音・タ行音・カ行音を発音するときには、有気無声子音、無気無声子音、有声子音の発音で戸惑うことが多い。台湾の日本語教育現場ではパ行音・タ行音・カ行音の指導法はあるが、過剰修正が原因であるのか、学習者は意識しすぎて発音し、かえって間違った発音を覚える場合がある。本研究の目的は、日本語のネイティブスピーカーの聴覚調査から破裂子音の受容度を探ることで、学習者に心理的な負担を与えない指導法を考案、提示することである。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・題目「日本語破裂子音の指導法について—自然さと受容度を中心に—」

「東呉大学日本教育研究会例会」、2020年11月の例会で発表予定

台湾の日本語教育現場ではパ行音・タ行音・カ行音の指導法はあるが、自身の母語である中国語はターゲットランゲージの日本語とは音声システムが異なることから、学生の指導に戸惑う台湾人日本語教師もいると想像される。そこで、今回の発表では、日本での調査の内容を紹介し、被験者のフォローアップインタビューも用いて、日本語学習者の発音を日本語母語話者はどのように自然と判断するのか、また、不自然と判断する原因は何なのかについて明らかにする。調査のデータと結果を活用して、台湾の日本語学習者に相応しい指導法の確立を目指す一助となるようにする。

○その他の活動

・山川和彦編(2020)『観光言語を考える』第10章「海外における観光教育と言語」執筆のために、東呉大学日本語文文学科の学生インターンシップの情報を提供した。

### 4. 今後の活動予定

①指導法の修正

②音声教材の再検討

・従来の指導法では、語中・語尾に来る有気無声破裂音は無気無声破裂音で発音するように指導していた。そのため、過剰修正が原因とも考えられる濁音で発音する学習者がしばしば見られた。

・実際の日本語教室では、学生の持つ音声の聴解力により学習に限界がみられる場合がある。したがって、上記①・②を進めるにあたっては、母語話者が「不自然」と判断したものだけにしてもよいのではないかと考える。(「違和感があるが、受容範囲以内」までの修正は目指さない。)これまでに得られた研究成果と、今後の研究の進捗から、学習者にふさわしい指導法の修正と音声教材の再作成を進める。